

溝越天狗の役割―《車僧》の間狂言小考―

伊海孝充

《車僧》のアイは太郎坊(シテ)に仕える溝越天狗を演じる「鷲流では「木の葉天狗」とする台本もある。この天狗について『日本国語大辞典』は「溝を越える力ほどしかない未熟な天狗」と記しているが、《車僧》の間狂言は大きな溝を飛び越えた者がそれを誇らしく思った慢心よって魔道に落ち、天狗となったという由来を語る。説話文学などが描く天狗は政治的な憤怒や驕傲により魔道へと墮落した者が多い。それらと比べると、溝越天狗の慢心はずいぶん志が低い、そこがこの天狗の愛らしさだといえよう。

管見によれば、室町時代までの文献で溝越天狗が登場するのは《車僧》のみである。山伏の能に用いる替間らしい《むこ入天狗》(大蔵虎明本所収にも、愛宕山の修辞の中で溝越天狗の名が見えるので、能狂言と密接な環境で誕生した天狗だと想像されるが、その出自ははっきりしない。

その溝越天狗は、①「溝越天狗」の謂れ②車僧について③車僧を狙う太郎坊④「浮世をば」の歌の解釈⑤車僧誘惑の下知⑥溝越天狗の挑発、といった内容を語る(仮に大蔵流森川杜

園旧蔵本『謡曲大観』に翻刻に拠る)。基本的に一人語りであるが、後半の⑤⑥では車僧を魔道へ引導しようとする滑稽な演技も入り、難解な問答が展開される前場との緩和を生む。ただし、本稿で問題にしたいのは車僧について説明する②の箇所である。

語りアイにしる、立チシヤベリにしる、間狂言は前場の再説・詳説や補足といった内容が多い。《車僧》の間狂言も④で「浮世をば……」の歌の「輪」の解釈が披露されるので、詳説の役割も担っているが、②は再説や詳説ではなく、補足とも一線を画する。車僧は深山和尚をモデルとする説があるが、他の文芸には見かけない名であり、能の中でも自らの出自も語らず、難解な問答を繰りひろげる(謎の人物)としか理解できない。さらに、後場の冒頭には「げに雪中に山路なし。さて車輪はいかに車僧。われ程貴き者あらじと。慢心の心路跡なからんや」(謡曲大観。諸本異同なし)と太郎坊に咎められる。前場には車僧の奢りなどは語られておらず、むしろ高度な禅の教養を持つ克己的な僧という趣があるだけに、この太郎坊の言葉はずいぶん唐突な印象を受ける。

この(謎)に一定の輪郭を与えてくれるのが、間狂言②の部分である。間狂言台本は車僧のことを次のように説明している。

A 爰に車僧と申して貴き人の御座候。此の人いにしへは高位の人なれども。妻におくれ悲しみの餘り。髻切り遁世して其の名を車僧と申す。(中略)この車を牛も引かず。まして人も引かぬに。佛子をも一つふれば。山をも峯をも海川の隔てもなく。飛行自在に車に乗つて虚空を走る人なり。かゝる奇特の人體なれば。我慢の心暫くも止む事なし。(『狂言集成』)

B 車僧と申候方。我程貴ひ者か有まひと自慢を召れ候間……(能楽研究所蔵松井万蔵筆大蔵流間狂言)

C 爰に車僧と申て。きたひふしぎ成お僧の渡り候がさがの迄まいられしに。我程貴ひ者ハ有まじいとてまんぜられ候処に……(貞享松井本)

D 爰に車僧とて貴き知識の在が牛も見へず人も引ぬ車に乗り。四方の山々を飛行自在にあらく人の候。されば其貴僧の心の内に思わゆる様。我程貴者ハ三国にも有間敷きと。餘りに慢心の指事を……(水野文庫蔵「鷲流間の本」)

このように、車僧が自分の能力に慢心を覚えていると語る点では同じで、後場の太郎坊の台詞に対応するようにBCDは「われ程貴き者あらじ」という類の文句がある。ただし、各本から受ける印象は少しずつ異なる。

和泉流三宅派の台本であるAは、傍線部の

ように妻と死別した男が悲しみの果に出家し、(この内容は御伽草子「車僧(松根物語・いとさくら)」と似るが、Aが御伽草子に拠ったか)その後身につけた「飛行自在」の能力に対して常に「我慢(慢心)」を抱くようになった(点線部)と語っている。大蔵流の台本BはA同様に日常的に慢心を抱いているようだが、「自慢を召れ」と述べているので、その奢りを他者に話しているようにも読める。同じく大蔵流の台本Cは二重傍線部のように、嵯峨野までやってきたときに、ふと自らの貴さに対して慢心を抱いたように語られている(その以前はわからない)。鷲流の台本Dは飛行自在の能力に慢心を抱くのはAに似るが、それを心の中に秘めているのである(波線部)。

これらはわずかな差異かもしれないが、車僧の造形に与える影響は小さくない。Aでは自分の能力を常に誇っている驕慢の僧というイメージがあるが、Cではかりそめの慢心に襲われた貴僧という姿も看取できる。またDからは、外目は澄ましているがその内側に奢りを隠す不遜な僧を想起せられる。

さらに、これらの間狂言は車僧だけでなく太郎坊の造形にも関与する。Aからは魔道に引き込む者を常に探し求める視線があるとしたら、CDからは僅かな慢心をも見逃さない超人的な眼力が窺える。すなわち、溝越天狗は前場の詳説をしたり、緊張の禅問答に緩和を生む役割があるだけでなく、車僧・太郎坊の輪郭を克明に描出する役目も担っているのである。この役割は前場が戸隠山の出来

事であったこと、女の正体が鬼女であることを開陳する《紅葉狩》の武内神に似ている。武内神が前場の不思議な物語の(種明かし)をする役目を担っているように、溝越天狗もまた前場の奇特定の登場人物の(正体明かし)をする役割を負っているのである。

右のごとく、溝越天狗が何を語るかによつて、《車僧》の物語世界は少なからず変様するのだが、そうすると、成立当初の間狂言(もしくはそれに近いもの)はどれだったのだろうか。現存する間狂言台本はみな江戸時代のものであり、能楽資料から辿ることはできないのだが、京都大学付属図書館蔵「車僧草子」(室町時代後期写)から、その面影を掬い取ることができないだろうか。この天下の孤本の奈良絵巻は、溝越天狗は登場しないなどの差異もあるが、能《車僧》の詞章と一致する文句も多く、物語の構成も酷似している。奈良絵巻が能をもとにして制作されたという見方が優勢だが、その説に従うならば、能が語らない車僧の人物背景は、当時の間狂言に拠っているとも考えられる。

「車僧草子」の冒頭では車僧のことを次のように語っている。

この人は、西天の祖師、達磨尊者の、後を継ぎ、螢雪の窓の内に眼を晒し、三十余年の星霜を送り迎へて、終に己身仏身、仏祖不伝、教外別伝不立文字の法機を悟り極め、今ははや、心にかかる子細なしと、少し慢心の心をおこし給ふ。(室町物語大成に適宜漢字を宛てる)

車僧が慢心をおこす点は間狂言各本と同じだが、慢心が修行の境地を極めた禅僧の心の隙間を襲う(傍線部)という前掲Cに近似した内容となっている、この一節が室町時代の間狂言の面影を伝えている可能性はないだろうか。そもそも能《車僧》の内容からは、常々慢心を抱く車僧像は想起しづらく、Cや「車僧草子」のように、わずかな心の隙きをつかれた貴僧のほうがつくりくる。

もちろん、これは憶測にすぎないが、連歌師・宗長の晩年の日記「宗長手記」に記された今川家臣・朝比奈時茂との雑談の中に気になる一節がある。

教外別伝・不立文字の宗師、即今誰人ならん。参者凡魔魔とも天狗ともいふべからむといふ人侍し。是みな世俗にいふ溝越天狗等にや。(大永五年(一五二五)十一月二十五日条・岩波文庫)

このように、当世の禅僧を批判する一節の中で溝越天狗の名がみえるのだが、「みな世俗」で言っていたほどこの天狗の名が流布していたとは思えないので、宗長が能《車僧》を踏まえていた可能性が高い。しかも「車僧草子」の中で車僧の讚える語として見える「教外別伝不立文字」から始まる一節に、わざわざこの天狗を引いているのである。「車僧草子」には溝越天狗は登場しないので、このような言葉の連なりが生じた背景には、先の「車僧草子」冒頭の一節が当時の間狂言と重なりあうところがあったのでは、と妄想したくなるのである。

(法政大学教授)